

資料紹介・東京美術学校日本画科卒業制作「外科手術」

——鏡花作品受容の一側面——

杲 由 美

はじめに

泉鏡花「外科室」（初出『文芸倶楽部 第六編』明治28・6・20、以下本文の引用は初出により、字体は現行のものに改め、ルビは適宜省略した）が、発表当時諸文芸誌上で批評され注目されることで、鏡花の出世作となったことは改めて言うまでもないが、その鮮烈な作品内容の影響は文壇のみにとどまらず、意外な方面においても形をなして現れる。本稿では、東京美術学校の生徒が制作した「外科手術」なる絵画を紹介し、小説「外科室」受容のあり方の一端として考察を行うと共に、東京美術学校における文学への関心の表れについても言及することとする。



【図版資料】「外科手術」

葛揆一郎（江月）作。明治三十七年本科卒業・岩手県出身・生歿〓明治十三年〓大正七年。絹本着色・軸装・84.2×145.3⁽¹⁾

一 葛揆一郎について

「外科手術」は、右に示したように、岩手県出身の葛揆一郎なる生徒が東京美術学校日本画科の卒業制作として描いたものである。はじめに、作者である葛揆一郎について、『東京美術学校校友会月報』⁽²⁾（以下『校友会月報』と略す）の記事から知れるところの経歴を以下に記す。

『校友会雑誌』第一号（明治32・11・29）の記事「生徒成績品展覧会⁽³⁾ 賞状授与式景況」によれば、葛揆一郎は明治三十二年四月十三日に行われた右の授与式において、成績優秀者として予備科⁽⁴⁾二等賞の表彰を受けている。東京美術学校では本科の修業年限四年以外に一年間の予備課程の履修を義務づけており、学年期間は九月から翌年七月までであるから、葛氏の上京は遅くとも明治三十一年夏頃までのことと考えられる。また『校友会月報』第二卷第七号（明治37・5・10）「東京美術学校近事」に「昨年七月学年試験の際病気の故を以て、卒業試験を延期せられたる、日本画科の葛揆一郎氏（岩手県士族）は、三月二十九日卒業証書を授与せられ、

同時に文部省より、図画教員免許状を下附せられたり」とあるように、本来なら前年七月に卒業すべきところを、病気のため半年延期となっている。卒業後、葛氏の画家としての活動がどのようなものであったか詳細は不明だが、郷里岩手において「彩友会」なる研究団体を主催し活動していた事が『校友会月報』の記事に確認できる。以下『校友会月報』より、管見に入った記事を挙げておく。

○彩友会第一回研究会 同会は岩手県盛岡に在る本校卒業生の武谷富造、葛江月両氏の主催せる会にして、一月三十日其第一回を催したりといふ、斯道のため、誠に喜ぶべき事なり。⁽⁵⁾（第四卷第六号「芸苑彙報」欄 明治39・3・1）

○盛岡市の彩友会展覧会 彩友会第二回の展覧会は、全会幹事武谷松泉、葛江月、小岩峻氏の發起にて、去五月一日より数日間、盛岡市桜山神社境内にて開かれ、本校よりも前記諸氏の請求に依り、卒業制作数点を出品せしが、なか／＼の盛況なりし旨、岩手日報に見えたり。（第四卷第九号「芸苑彙報」欄 明治39・6・7）

○葛揆一郎氏 同氏も、盛岡にて展覧会開設の用務を帯び、十一月中旬上京せられたり。（第六卷第三号「卒業生動靜」欄 明治40・11・30）

なお、大正五年十一月二日から同月十七日にかけて美術学校の大講堂で開催された文部省の図画講習会の参加者に葛揆一郎の名前があり、当時の職は「岩手県立福岡中学校教諭」とされている。⁽⁶⁾

これらの記述によれば、葛氏は美術学校卒業後職業作家として活動していたわけではなく、郷里の岩手県で学校教師として美術教育に携わりながら「彩友会」なる美術研究団体を主催し、当地における美術の普及発展に尽力していた人物と捉えて間違いないだろう。だが葛氏に関する記事はこの他には見当たらず、大正七年の死因についても現時点では分からない。葛氏の経歴については、今後『岩手日報』など地元の資料にも当たりつつ、詳細を把握するよう努めたい。

二 制作の経緯について

吉田千鶴子「東京美術学校日本画科の歩み」（注（1）前掲書所収）によれば「外科手術」は、明治三十四年八月に校長に就任した正木直彦が主張するところの「写生主義的傾向を最も直截的に」示したものであり、「ある小説にヒントを得て、貴婦人が手術を受ける場面を描いた」作品であるが、その製作の様子は当時の『校友会月報』の「教室雑俎」欄に詳しく記されている。本欄は美術学校の生徒がそれぞれ自分の所属する科の近況や教室での出来事等を述べるもので、やや長くなるがその一節を次に引用する。

去年十一月卒業製作の命令が下つてから誰も他で想像する様に遊んで居る者は一人もない、否命令の下らぬ以前からそれ／＼考に考へては居つた（略）されば誰も其養つた想を如何に現はさうかと思ふて、一通りの苦心では無いのである。先づ画題の選択で、夜静なる時、目を閉ぢて、默然の三昧に入ると、迷ふは／＼は、之が為曉に徹する事も少くない。

（略）

葛君、氏は題を或る小説から取ったとかで、貴婦人に手術を施す所で、第一に手術の方法は、氏の知己の医学士に教を乞ふた由で、又手術室は東洋第一とか云ふ或病院の実地を写生したのであるが、観覧の厳なるより、氏は医士のつもりで内々写生に通ふた由で、其外赤十字や、府下の有名な手術室は、大体見廻つて、手術の有様を見た由だか、又手術者の服と看護婦の服装は自ら新調したが、茲に面白いのは画中の主人公たる可き手術主任のモデルに或医士の進んで成つた事である。(略)又異彩を放つたのは、其夫人をして図中の被手術者たる貴婦人に擬した事であるが、其婦人の果して図中の伯爵夫人たるに適して居りしや…

(永江邸)⁷⁾「教室雜俎 日本画科四年」『校友会月報』第一卷第八号 明治36・4・15 傍点ママ)

明治十年代以降の美術界では、西洋画・日本画いずれの分野においても、何を描くべきかという画題に関する言説が目立つようになる。原田直二郎作「騎龍觀音」(明治23)をめぐって森鷗外と外山正一の間に交わされた画題論争などはよく知られた例であろうが、その論者や議論のレベルは様々であつても、畢竟「何を描くか」という問題に頭を悩ませるのは絵画を志す者共通の悩みであり、それは就学中の生徒とて同様である。右の記事には卒業制作の画題選択に各々苦慮する四年生の様子が克明に報告されているが、とりわけ葛氏の制作過程が詳細に述べられているのは、その選択された画題と制作方法が、同級生の中にあつて一際奇抜なものであつた事に拠るだろう。同級生の永倉茂(江村)は葛氏を「専ら人物写生主義」と言い、またその画題を「世俗の複雑した情状を写す事に重きを置いて居るから、以前にない方面を解釈される事と想ふ」と推量しているが、確かに葛氏の選んだ画題は永倉が考えた通りのものだったと言える。永倉は続けて「同窓生の内大方は考へも極つた様だが、誰れも熟考に熟考を重ねて居るのかして、発表した者が無い」とも述べており、明治三十五年末の時点で自分の制作画題を公にした生徒はまだなかったようである

から、葛氏が本格的に「外科手術」の制作に取り組み始めたのはおそらく三十六年以降のことであろう。

文中には「ある小説」とあるのみで題名を明記してはいないが、「外科手術」という題がただちに鏡花の「外科室」を想起させること、右文中で被手術者を「伯爵夫人」と特定していること、「外科室」において「助手三人と、立会の医博士一人と、別に赤十字の看護婦五名」とされる医師や看護婦の数が「外科手術」に描かれたそれにほぼ一致していることなどから考えて、本画が鏡花の「外科室」を基に制作されたことは明らかである。

では、葛氏はいつどのような形で「外科室」という小説の存在を知ったのだろうか。明治十三年生まれの葛氏は、「外科室」が発表された明治二十八年当時十五歳である。その年齢ならば本作をリアルタイムで読み、その印象が記憶にとどまっていなくても不思議ではないが、「外科室」発表年と卒業制作着手の年の間には約八年もの空白がある。だが「外科室」はその後『明治小説文庫第十編』（明治31・9 博文館）にも収録されており、「外科室」以後に鏡花が発表した作品を評する際、既発表作品の「外科室」が引き合いに出されることも多く、「外科室」という小説を知ったのが上京後のことであつたとしても、東京に暮らす学生ならば古本屋を涉獵するなど雑誌・単行本入手の方法はいくらでも考えられただろう。東京美術学校には図書館にあたる「文庫」も設備されており、そこで初出誌『文芸倶楽部』を手にした可能性も考えられる。⁽¹⁰⁾ また、後述するように美術学校には文学趣味のある学生が少なからず存在しており、そういう級友から知識を得たとも想像できる。その時期を特定することはむずかしいが、彼が「外科室」に注目するに到る環境は充分に整っていたと考えてよい。

だが一般に、小説の複雑な内容を、時間の一瞬一瞬を切り取って見せる絵画という媒体で表現するには自ずと限界がある。それゆえ、小説「外科室」における手術の場の異様な雰囲気や、貴船伯爵夫人と高峰医学士の言外の交感といっ

た独自性が「外科手術」の画面に看取されるかといえ、その点には疑問を抱かざるを得ない。

「外科室」という小説から葛氏が受けた感銘は、単に写生の対象としての新奇さだけではなかっただろうし、手術室における高峰と貴船夫人の交情に感ずるものがあつたからこそ、手術室の場面を画題に選んだのもあろう。加えて、画家としての葛氏の視点に小説の語り手である画師「予」のそれを重ねたのが「外科手術」であると解釈すれば非常に興味深いものがあるが、「外科手術」に直接呼応する「外科室」の本文箇所は、先に引用した手術室内における人物の人数・構成と、「何となく凄まじく侵すべからざる如き観ある所の外科室の中央に据へられたる、手術台なる伯爵夫人は、純潔なる白衣を絡ひて、死骸の如く横はれる、顔の色飽くまで白く、鼻高く頤細りて、手足は綾羅にだも堪へざるべし。唇の色少しく褪せたるに、玉の如き前歯幽かに見え、眼は固く閉したるか、眉は思ひなしか顰みて見られつ。纔かに束ねたる頭髮は、ふさ／＼と枕に乱れて、台の上にこぼれたり」という夫人の描写部分のみであり、小説の表面的な情景を写すにとどまつたという印象を免れない。

その意味では「外科手術」は、小説における観念性の移植ではなく、前出吉田氏の言にもあるように、あくまでもモチーフとしての医師・看護婦や手術の様子を写生的に描く点にその主眼があるようにも思われる。

だが、明治二十六年の第一期卒業生以降、毎年生み出される卒業制作の多くが依然歴史上の人物や伝説といった伝統的な画題を選択する中⁽¹⁾にあつて、「外科手術」が一際異彩を放つ作品であることは動かしがたい事実である。「外科手術」という作品は、鏡花作「外科室」が有する文学的意味を絵画として表現し得ているか否かではなく、美術学校の一生徒が鏡花作品ひいては小説という媒体に寄せる関心の高さが直接感じられる点において、同時代資料として評価すべきではなからうか。なお「葛君は写生は一番得意で、又ローマンチックを自分の主義と為て居る⁽²⁾」とされる彼の資質が、「外科室」に惹かれる必然的な要素であつたかもしれぬ点も付言しておく。

更に、こうした文学への関心が葛氏個人の問題に留まらず、当時美術学校の中に広まりつつあった文学熱の一端としても捉えられることを次章で述べることにする。

三 東京美術学校における文学熱

東京美術学校では、明治三十五年六月に校友会組織の一環として文学部が新設されている。文学部はその目的と活動内容を「文学美術ニ関スル見識ヲ高尚ニスルヲ目的トシ詩歌文章等ヲ研究シ又ハ朝野ノ名士ヲ延キテ諸般ノ講話ヲ請フモノ」（明治三十六年十一月改正「東京美術学校校友会規則」第十九条）と定め、体育部・音楽部と共に発足したもののだが、当初の活動は振るわなかった。

同年、校友会の新しい機関誌として『東京美術学校校友会月報』が創刊され、文学趣味を持つ生徒が創作した俳句・短歌や漢詩、散文などが掲載されるようになると、誌面は活況を呈しはじめる。また「今の美術家にかく所のもの、詩的趣味を感知することの乏しきにあり、文学的趣味を味ふ事の欠乏せるにあり」⁽¹³⁾、「美術は文学の産物ではないが、文学的志想に富んだ作家の作品が美的趣味に富むことは争ふべからざることだ」⁽¹⁴⁾といった声にうかがえるように、美術の分野における創作活動に文学的素養の必要性を実感する生徒が現れ、また「江見水蔭の小説「花」を讀みて、不徳悪むべき溝谷を見、此日亦小杉天外の「魔風恋風」に於て彼殿井を見たり」⁽¹⁵⁾、「僕は常に「帝国文学」を愛讀してゐるが、わけて文学士齋藤藤の人を尊敬してゐる」⁽¹⁶⁾といったように、特定の作家や作品を提示して自分の文学愛好ぶりを示す者もいるなど、その接し方は各様だが、造形芸術を志す裡にも文学に親しもうとする生徒が少なくなかったことはこれらの言説に明らかである。

こうした動きに伴って在校生や卒業生の間から文学部の活動再開を熱望する声が徐々に増えてゆき、かくして明治⁽¹⁷⁾

四十年三月に校友会文学部が再興する。夏目漱石・上田敏を第一回目の講師として招聘した講話会（明治四十年四月二十日から中断も含めて大正七年まで定期的に開催された）を主催したり、投稿を募って『校友会月報』誌上に生徒の創作詩歌、小説・評論・紀行文などの文章を掲載するといった文学部の活動を通して、美術学校生徒の美術と文学の交流に対する意識は次第に高まっていた。

葛揆一郎自身が文学に対しどの程度の親近感を抱いていたかは分からないが、ともあれ明治三十年代後半の東京美術学校におけるこうした文学熱高揚の気運が、卒業制作に取り組もうとする葛氏にも何らかの影響を及ぼした可能性は充分考えられよう。

更に興味深いのは、自らの卒業制作の画題を同時代の小説に求めた生徒が葛氏以外にも存在することである。明治四十年選科卒業の山村豊成（耕花）作「最期」は、戦場の若武者が二人の尼僧に看取られて死にゆく場面を描いたもので、これは尾崎紅葉二人比丘尼色懺悔¹⁸（明治22）の登場人物をふまえていよう。明治四十一年選科卒業の小村泰助（雪岱）は在学中より鏡花を愛読し、のちに鏡花作品の単行本の装丁や挿絵を手がけ、私生活でも親しい間柄にあった事でよく知られるが、雪岱の卒業制作「春昼」に描かれる祠とその周辺に乱舞する無数の蝶は、言うまでもなく鏡花の「春昼・春昼後刻」（明治39）を基にした一風景である。更に大正九年本科卒業の林虎雄（皓幹）作「業火」は炎に包まれた車の中で焦熱に苦しむ姫君を描いており、取りも直さず芥川龍之介「地獄変」（大正7）を想起させる作品である。

これらの作品の成立経緯については他日言及することとし、校友会文学部の活動についても、『校友会月報』の誌面調査を中心に引き続き検討を重ねたい。

おわりに

葛掇一郎作「外科手術」は、小説「外科室」が当時の文壇内部の評価とは異なる次元において受容されていたことを明確に示す作品である。同時に本作は、明治三十年代後半の東京美術学校における文学熱の表れ的一端としても位置付けることができる。これ以外にも東京美術学校の生徒による文学への親和には多様な側面があり、この点は、『明星』や『ホトトギス』といった文学雑誌における美術への接近という同時代の芸術思潮の影響に鑑みつつ考察してゆく必要もあると考える。

付記・本論は、京都女子大学近代文学研究会第五回（2010・1・23）および第十三回（2012・3・29）における発表内容に基づくものである。席上、峯村至津子先生、山崎ゆみ先生、川島朋子先生よりご助言を賜った。記して深謝申上げる。

注

- （1） 図版および記載事項は、『東京美術学校卒業制作 日本画』（昭和58・5・15 京都書院）所収の情報による。
- （2） 東京美術学校校友会は明治二十四年十一月に東京美術学校職員および生徒を構成員として発足、機関誌の発行、常会・大会の開催、会員の作品展、遊技会や講話会などの催しとその主な活動であった（『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第一巻』昭和62・10・4 ぎょうせい 第三章第三節 200頁参照）。校友会は昭和十六年まで存続し、その間に『錦巷雜綴』（明治27～31年）、

『校友会雑誌』（明治32〜34年）、『東京美術学校校友会月報』（明治35〜昭和7年）、『校友会会報』（昭和9〜12年）、『東京美術』（昭和12〜15年）、『東京美術学校校友会誌』第十九号（昭和15年10月）などの機関誌が発行されている。

（3）卒業制作の展示は、明治二十七年四月十日より一週間にわたって行われた第一回生徒成績物展覧会以降、毎年開催されていた。

（注）（2）前掲書『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第一巻』第四章第一節 243〜247頁参照

（4）明治三十二年当時は、日本画会附属共立美術学館が非公式の東京美術学校予備教育機関であった。『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第二巻』平成4・8・15 ぎょうせい 第一章第一節 29頁参照

（5）この催しに関する『岩手日報』の記事も併記されているので抜粋して引用しておく。

○彩友会第一回研究会 同会は予記の如く、三十日午後一時より杜稜館に於て開かれ、来会者三十余名、参考品には東西の名画、及会員の製作品を陳列し、葛江月氏の顔面表情説、武谷松泉氏の写生談ありて後、会員の揮毫に係る課題画を互評し、終て會員有志の合作席画を催し散会せしが、此有望の会合が永遠に継続せば、将来当市に於る絵画界の発展と共に、斯道に一新面を啓かんこと期して待つべく（略）毎会會員外と雖も、有志の者は随時参会差支なしとの事なり。

（6）『東京美術学校近事』『校友会月報』第十五卷第六号 大正5・12・28。

（7）執筆者「永江邸」は明治三十六年本科卒業生の永倉茂（江村）か。

（8）『教室雑誌』『校友会月報』第一卷第五号 明治35・12・5。

（9）たとえば「外科室、夜行巡査の如き、惨は惨なりと雖もこれ強ち在り得べからざる出来事にあらず」『帝国文学』第五卷第五号雑誌欄「病的作家」明治32・5・10、「足下が外科室黒蜥蜴の如き、始めて世に頭はれたる時に於て足下は明かに基本領を示せり」『同』第六卷第五号雑誌欄「事象の累」明治33・5・10などの評言。

（10）文庫には各種雑誌も随時寄贈されていた。たとえば『校友会月報』第二卷第一号（明治36・9・30）「文庫報告」欄には「最近寄贈を受けたる図書雑誌左の如し」として、『文芸倶楽部』『新声』『太陽』『帝国文学』などの誌名が挙がっている。

（11）注（1）前掲書『東京美術学校卒業制作 日本画』に掲載された、第一期生の卒業年（明治二十六年）から葛氏の卒業年（明

治三十七年)までの卒業制作を概観すると、最も多いのは人物画であり、それも「菅公」「王羲之」「悉達太子」「香久耶姬」「王昭君」「光明皇后」など、歴史・伝説上の人物を画題とするものが目立つ。画題についてはより正確な分類を行った上で全体的な考察を行うべきと考えるが、少なくとも右の期間中において、作者周辺の同時代的な事項に取材した卒業制作はごくわずかである。

(12) 「教室雜俎」『校友会月報』第一卷第一号 明治35・6・21。

(13) 螻蛄山人「吹泡録」『校友会月報』第一卷第五号。

(14) 「はがきだより」欄、小螻蛄山人なる人物の投書『校友会月報』第一卷第八号。

(15) 海士「饒舌」第三『校友会月報』第一卷第八号。

(16) 「わが友の声」欄『校友会月報』第四卷第五号 明治39・2・12。当欄は在校生・卒業生からの投書を掲載するもの。

(17) とりわけ明治三十八年以降、「わが友の声」欄には「ヲット出た文学狂、詩文熱病者は茲にもござる(略)会則に有つて文学部のみが設立されないのは如何いふ訳か」「文学部を起すことは至極賛成」『校友会月報』第四卷第十号 明治39・7・21)といった要望が多く寄せられている。

(18) 雪岱「初めて鏡花先生に御目にかゝつた時」『図書』第5年50号 昭和15・3)によれば、鏡花の小説を知る契機は明治三十六年の秋頃、美術学校の教室で机をならべた小林波之輔という生徒が「鏡花の小説ほど好きなものはないと言って、暗記してゐる様に話して呉れ」た事であったという。美術学校の生徒の中に鏡花愛好者が少なからず存在していることを示唆する言説であり、更に調査を続けたい。

(本学非常勤講師)